

## 所 報

### 1. 研究所活動報告

#### 1. 研究プロジェクト

私学振興財団による学術研究振興資金を得て1982年度より3年間にわたって続けられた本研究所プロジェクト「大学入試における学力テストと能力テストの比較研究」、主査は原 一雄(第1班), 星野 命(第2班), 石川光男(第3班), 石本菅生(第4班)の報告書のまとめが出版された。

1983年度私学振興財団による学術研究振興資金を得た「アメリカ中等教育における対日観教育(歴史教育)の実情についての調査研究」(主査: B. C. デューク)の報告書が出版された。

#### 2. 講演会

1984年6月, アリゾナ大学東洋学科北川千里教授の“The Case go in Japanese”の講演が行なわれた。

#### 3. 研究員

Hallam C. Shorrock, Jr. カリフォルニア大学(海外交換留学プログラム副  
所長・日本文化講師)(元・国際基督教大学財務副学長)

「日本における国際教育の研究」で, 1983年9月より1984年3月, 1984年7月から8月迄。

## 研究室活動報告

### 教育哲学研究室

#### <人の動き>

##### 研究休暇

ベンジャミン・C・デューク教授：1983年9月1日～1984年3月31日

林 昭道助教授：1984年4月1日～1985年3月31日

立川 明助教授：1984年9月1日～1985年6月30日

#### <研究活動>

1983年9月5日～6日，研究室研究合宿

1984年2月15日，卒論・修論発表会（於教育学科会議室）

2月17日，講演会「大学教師の資質能力を考える——一般教育としての教育学担当の一年間の経験から——」杉野女子大学，田村皖司教授

5月19日，大学院新入生オリエンテーション・研究発表会

8月6日～7日，ICU教育セミナー（於東京青山会館，卒業生教員及び学部生の計40名参加），特別講演：中野照海教授「授業の設計と形態等にかかわる諸問題」

#### a. 教育哲学

##### 金子武蔵客員教授

##### I. 研究活動

ヘーゲル「政治論文集」を主題とする演習を担当。

##### II. 著作

論文「ヘーゲルの就職テーゼ」，「日本学士院紀要」第38巻第2号，1982. 11. pp. 41～81.

##### 讃岐和家教授

##### I. 研究活動

前年に引き続き，キリスト教教育哲学および教員養成問題の研究を行うとともに，大学における一般教育の問題，および国際化に伴う教育の問題の研究も行った。

##### II. 学会発表

1 1983年10月15，16日，東北大学で開催された教育哲学会第26回大会に出席し，第

2日目の課題研究「教育哲学をどう教えるか——現代日本における教育哲学のあり方」で、発題報告を行った。

- 2 1984年3月24日、民主教育協会の高等教育文献研究会において、J. G. Gaff, General Education Today, Jossey-Bass, 1983の紹介を行った。
- 3 1984年8月30日～9月1日、甲南女子大学で行われた日本教育学会第43回大会に出席し、第2日目のシンポジウムⅣ、「大学の一般教育」の司会を行った。

### Ⅲ. 著 作

- 1 『教師教育——課題と展望——』（鈴木慎一、右島洋介編著、勁草書房、1984年1月刊）に「第4章、外国における教師教育改革」を寄稿（鈴木慎一氏と共同執筆）。
- 2 「貿易摩擦と教育」, 「調査統計通信」第22号（埼玉県市町村教育委員会調査統計担当者連絡協議会、1984年2月発行）。
- 3 「アメリカの教員養成改革の歴史と最近の動向」, 「大学時報」第175号、1984年3月発行。
- 4 「教師教育の改善について」, 「キリスト教学校教育」第277号、1984年3月発行。
- 5 「教育哲学の課題と方法をめぐって」, 教育哲学会「教育哲学研究」第49号、1984年5月発行。
- 6 「国際化社会における教育課題の視点と展望」, 日本教育学会「教育学研究」第51巻3号（1984年9月刊行予定）。
- 7 「文献紹介 J. G. ガッフ著、今日の一般教育（1983）」, 「IDE」第255号（1984年10月発行予定）。

### Ⅳ. そ の 他

#### 1 講演

「国際理解とこれからの学校教育」。1984年7月25日、都立教育研究所において。

#### 2 学会での役職

- 1) 日本教育学会：学会誌「教育学研究」編集委員（1984年1月まで）、および同上英文校閲担当（同年7月以降）。
- 2) 一般教育学会：理事、および学会誌「一般教育学会誌」編集委員。

#### 3 上記以外の学外活動

- 1) 文部省：一般教育視学委員（1985年3月まで）。
- 2) 三鷹市：社会教育委員、および図書館協議会委員（1983年9月まで）。
- 3) 三鷹市：教育委員（1983年10月から87年9月まで）。
- 4) キリスト教学校教育同盟：「キリスト教学校教師養成事業委員会」委員、および「第5回研究、研修セミナー」実行委員長。
- 5) 「全国私立大学教職課程研究連絡協議会」：事務局長。
- 6) 「関東地区私立大学教職課程研究連絡協議会」：事務局長。

**川瀬謙一郎教授****I. 研究活動****1 個人研究**

- a) 市民エートスの歴史的形成過程の研究
- b) 前項の方法論的基礎としてのウェーバー宗教社会学の研究

**2 共同研究**

教職教育の制度、方法に関する研究。これは東京地区教育実習研究連絡協議会を母胎とする科学研究費補助金（総合研究A）による研究組織の一員として行ったものである。

**III. 著作等**

前記2の共同研究の成果報告書「教育実習の内容と方法及び教育的意義についての総合的研究」（研究代表者：小口忠彦教授〔放送大学〕，昭和59年3月）の一部，II.「教育実習の管理・運営に関する事例研究と実体調査」pp.30~36.

**IV. その他**

教育哲学会編集委員会常任委員

**立川 明助教授****I. 研究活動**

1840年代から1860年代を中心としたマサチューセッツ高等教育史を、科学技術の発達と宗教的伝統との関連を主題に据え、第一次資料をもとに作成している。1984.6.28以降は、マサチューセッツ・ケンブリッジを拠点に、ハーヴァード、アムハースト、マサチューセッツ・ステイト・ハウス等の古文書館に於いて、上記のための資料の収集を続けている。

**II. 学会発表****1. International Standing Conference for the History of Education**

(1983.9.5-8, Oxford, U.K.)に参加し，“Lawrence Scientific School and Harvard’s Separation from the State.”と題する研究発表を行なった。

**2. 日本教育史学会年次大会 (1983.10.9-10 於金沢)に参加し，“19世紀中葉のマサチューセッツに於ける《公私》高等教育の転回”と題する研究発表を行なった。****III. 著作**

“The Founding of the Massachusetts Agricultural College: An Interpretation.”『教育研究』26, 1984 pp.1~23.

**IV. その他**

- 1 日本教育学会『教育学研究』英文校閲係 (1984.6まで)

- 2 大学基準協会 教員養成に関する専門委員会委員
- 3 大学セミナー・ハウス 国際セミナー委員

## b. 教育思想史

### 長 清子教授

#### 1. 研究活動

- a. 近代日本におけるリベラリズムの研究
- b. 日本文化のアーキタイプの考察
- c. 近代日本における天皇制の研究

#### 2. 編 著

- a. *Comparative Chronology of Protestantism in Asia*, (編集代表) アジア文化研究所, 1984年3月, 189頁。
- b. 『日本文化のかくれた形』(編) 岩波書店, 1984年6月19日, 175頁。

#### 3. 論 文

- a. "The Significance of Dr. Yuasa Hachiro's Life and Thought in the Modern Development of Japan", *ICU Asian Cultural Studies* No14, February 1984.
- b. "Takekoshi Yosaburō — A New Perspective in Meiji Historiography," *Europe Interprets Japan*, (edited by Gordon Daniel) Paul Norbury Publications, England, June 1984.

#### 4. その他

- a. 国連大学主催「明治維新の役割」を主題とする国際会議 ("International Conference on the Meiji Restoration" 1983年10月18日-22日, 於国連大学) に参加, 「未完の革命 明治維新—思想史的考察の一視角—」を発題。  
(Presentation on "Unaccomplished Revolution, Meiji Ishin— from a view point of intellectual history—") at the United Nations University, Oct. 18-22, 1983.
- b. 新島襄生誕記念会講演「新しい日本人へのヴィジョン——新島襄の思想再考——」同志社新島研究会, 1984年2月13日。
- c. 日本イギリス哲学会年次大会シンポジウム「日本におけるイギリス思想の受容」(Ⅷ)——「昭和ファシズムへの道に抗して——長谷川如是閑・河合栄次郎」の総司会, 1984年3月28日-29日, 於横浜市立大学。
- d. *Books on Japan in English* (joint holding list of ICU Library and International House of Japan Library) の出版記念講演, 「日本文化を見る眼—西洋人・アジア人・日本人」("Views on Japanese Culture:

Western, Asian and Japanese”), 1984年5月15日，於国際文化会館。  
そのSummary, “Views on Japanese Culture”は, *IHJ Bulletin*,  
Vol. 4 ,No. 3 ,Summer 1984に掲載。

- e. 国際文化会館評議員, 教育哲学会理事, 同編集委員会委員長, 日本イギリス哲学会理事, UBCHEA 評議員。

### c. 比較教育学

#### B.C. Duke 教授

##### I Research Activities

1. The Pacific War in American Junior High Schools (Mombusho Kagaku Kenkyu Hi Grant)
2. One Hundred American Teachers' View of the Japanese (Nihon Shigaku Shinko Zaidan Gakujutsu Kenkyu Shinko Shikin Grant)
3. Great Educators From Asia: Japan. (Association for the Promotion of International Cooperation Grant)

##### II Travel: United States and England

##### III Publications

Book Review: EDUCATIONAL CHOICE AND LABOR MARKETS IN JAPAN by Mary Jean Bowman, in *Work and Occupations*, October 1984

In Preparation: *The Japanese School: A Challenge to Industrial America*

#### 松浦良充助手

##### I. 研究活動

- 1) 今世紀アメリカにおけるgeneral education とliberal education の思想と制度に関する研究。特にR.M.ハッチンズの教育思想を中心に, またわが国の一般教育の思想と制度との比較検討をも研究課題とする。(この研究の成果を, 教育哲学会第27回大会, 関東教育学会第32回大会, 及び本誌において発表の予定。)
- 2) 上記の研究の基礎論としての“思想と制度”のダイナミズムについての歴史的, 社会学的研究の試み。特に産業社会の構造変動と教育の思想・制度の関連の研究。
- 3) ICUアジア文化研究所研究助手として, *Comparative Chronology of Protestantism in Asia: 1792-1945*, (Sobunsha:1984) の出版をはじめとする諸研究活動の補助的作業に従事。

##### II. 学会発表

- 1) 「ロバート・M・ハッチンズの教育思想——学習社会における自由教育論を中心に——」, 関東教育学会第31回大会, (1983年11月5日, 於山梨大学)。

### Ⅲ. 研究論文

- 1) 『ロバート・M・ハッチンズの教育思想の研究——教育思想史におけるリベラル・エデュケーションの研究序説——』(国際基督教大学大学院教育学研究科提出教育学修士論文, 1984年1月)
- 2) 「ロバート・M・ハッチンズ『学習社会』論の思想的基盤——自由教育思想と公教育制度批判——」『関東教育学会紀要』第11号, 1984年。

### Ⅳ. その他

- 1) ICU教育セミナー(第7回, 於東京青山会館, 1984年8月6～7日)世話人。

### 山室吉孝(非常勤助手)

#### 1. (研究活動)

ピューリタニズムのエートスとプラグマティズムとの関係。  
人間の援助活動についての心理学的考察。

#### 2. (学会発表等)

1983年9月東京家政大学で「ジェイムズとピューリタニズムのエートス」という表題で日本デューイ学会第二十七回大会において発表する。

#### 3. (著作)

日本デューイ学会紀要<第二十五号>に「ジェイムズとピューリタニズムのエートス」という表題で載る。

### 佐藤尚子(非常勤助手)

#### 1. 研究活動

19世紀後半より1952年まで, 中国において展開されたキリスト教大学・中学校の教育について, 中国ナショナリズムとの関わりを中心に, 中国近代教育史全体構造の中で, その位置と役割とを明確にする。

#### 2. 学会発表

1983年10月10日 日本教育史学会27回大会(於金沢大学)「キリスト教宣教会の対中国教育活動と中国教育の近代化」

1984年7月12日 日本比較教育学会19回大会(於甲南女子大学)「1920年代中国のミッションスクール——ナショナリズムへの対応をめぐる日本とのちがい——」

#### 3. 著作

- (1) 「1920年代中国におけるミッションスクールと教育権回収運動——プロテスタント系中等学校を中心として——」(阿部洋編『日中教育文化交流と摩擦』1983

年11月刊所収)

- (2) 「中国キリスト教主義学校の登録認可問題——日本における訓令12号問題との比較——」(『日本比較教育学会紀要10号』1984年3月刊所収)
- (3) 「キリスト教宣教会の中国における教育活動——高等教育を中心に——」(『東亜』203号, 1984年5月刊所収)

## 山口和孝助手

### I 研究活動

- 1) “Great Educators from East Asia ——An Asian Perspective——”  
(Dr.デューク教授との共同研究)の翻訳作業
- 2) 教育基本法に込められた教育理念と教育改革の動向について
- 3) 近代公教育の展開と価値中立性の問題について

### II 学会発表

「靖国問題と教育基本法」, 日本教育法学会(専修大学), 1983年3月。

### III 論文

- 1) 「平和・民主主義の課題と宗教者の選択」『歴史評論』, No.406.1984年1月, 校倉書房。
- 2) 「憲法二十条と教育基本法九条」『季刊 教育法』No.59. 1984年7月, エイデル研究所。
- 3) 「教育改革と<心>の教育」『婦人新報』No.1006.日本基督教婦人矯風会。

### IV 共同研究論文

- 1) 『アメリカ中等教育諸学校における対日観教育(歴史教育)の実態についての調査・研究』(文部省科学研究助成金による研究報告書), 1984年3月。
- 2) “One Hundred American Teachers View of the Pacific War” (私学振興財団研究助成金による研究報告書), March.1984。

## 心理学研究室

星野命教授が9月1日より1年間の研究休暇に入られ、都留春夫教授が御病気のため、休養(秋学期)及び休職(春学期)でご不在という緊急事態を、研究室一同の協力で切り抜けた。4月からフルブライト客員教授としてニューヨーク州立大学バッファロー分校のバーバラ・バンカー先生が来学され、「小集団過程」について講義をされた。次に活動を報告する。

### 1. 心理学談話会、講演会

1983.12.13 心理学研究室談話会 於 シーベリーチャペル 2:30-4:00a.m.



学部1年生から院生までの顔合わせを行なった。非常勤講師の市橋先生も出席され、都留先生、原先生による研究室元教授（岡部、トロイヤー、マッケンジー、ベール諸先生）の紹介に耳を傾けた。

1984. 2.17 公開講座 講師 明田芳久非常勤講師 2:30-6:20 p. m.  
演題「攻撃と援助」
1984. 6. 8 心理学講演会 講師 青木邦子氏 東京女子大学短期学部教授  
演題「非行と教育」  
2:30-4:30 p. m. 於 シーベリーチャペル  
資料を基に、非行の現行の現状分析について説明された後、何が今なされなければならないか具体的な提言があった。出席者は約10名と少なかったが、予定時間を超えて質疑応答が活発になされた。

## 2. 発表会

1983. 9. 20 / 9. 27 / 10.4 卒業論文中間発表会 H-357
1984. 1. 21 修士論文発表会 H-106 10:00-12:00 a.m.  
発表者：黒崎祐子 高橋佳子 13名出席
1984. 2.14 卒業論文発表会 H-260 9:50 a.m.-5:00 p.m. 発表者 23名
1984. 5. 21. 修士論文発表会 ERB-357 12:20-1:10 p.m.  
発表者 永井史
1984. 5. 29 卒業論文計画書発表会 H-353 9:50-12:20 a.m.

## 3. セミナー

1984. 7. 2-7. 5 心理学サマーセミナー 於 八王子大学セミナーハウス  
参加者は約70名 星野、都留両先生及び林氏（5回生）も参加。原先生の基調講演の後、11の分科会に別れて学習。「私」について、参加全員が共に考え、パーソナリティ理論構成の試みという壮大な（！）企画もあった。

## 4. その他

1983. 12. 26 脳波計一式 納品 原先生の文部省助成金によるもの。
1984. 3. 9 非常勤講師慰労会 於 西荻窪 山水桜  
5:00 p.m.
1984. 4. 23 大学院新入生歓迎昼食会 於 シーベリーチャペル

1984. 8. 27

新入生 5 名 研究生 1 名

東京女子大学 新田・南両教授来学。同大学心理学研究室へ使用済みサル用ケージ、観察箱等を贈る。

## 星野 命教授

### I 研究活動

1. 1983年度後半は、前年度からひき続いての九学会連合の共同課題「日本の風土」に関する分担研究がまとめの段階に入るとともに、新たな共同課題「日本の沿岸文化」に関してほぼ隔月に1回の研究会に出席し、また分担課題を模索することが行われた。それらの結果として、九学会連合年報『人類科学』36号（1983）に、「幼年期の原風景としての風土——（第3報）恐怖・不安のイメージ——」を投稿し掲載した。また、第1報から3年間の研究のまとめとして、「青年の『心の風土』としての原風景」を近く公刊される『九学会連合共同課題：日本の風土』（弘文堂）の第7章に長谷川浩（青山学院大学教授）との連名で寄稿し、またその編集にも参加した。新しい分担課題としては、「沿岸・海難事故に対する住民の心理」をとりあげ、これに関連ある「遭難者の体験分析」を先に行なった村井健佑（日本大学教授）を招いての研究会を行なった。（1984. 7. 13）
2. 東京学芸大学海外子女教育センターとの関連では、本学大学院教育学研究科博士後期課程在学中の新倉涼子が「海外帰国児童・生徒受入れに関する小学校・中学校教師の意識調査」を企画し実施したので、それに協力し特に結果のまとめに参加して、上記センターの研究紀要第2集に連名で投稿し採用され掲載された。（1983年12月）。また、同センター内に設けられた「帰国子女教育問題研究プロジェクト」（委員長：川端末人神戸大学教授）に、はじめオブザーバーとして、1984年4月からは研究委員として参加し、主として帰国子女受入れをめぐる制度上の問題について研究を担当している。
3. サントリー文化財団の研究助成による「子どもの行動の国際比較研究」（代表者：吉川公雄帝国女子大学教授）の分担研究者として、1984.10.28から11月3日まで、マレーシア共和国ペナン市にあるマレーシア科学大学を訪問し、同大学教育研究所の所員とともに、ペナン市内および対岸のケダー州の三つの民族系、すなわちマレー（イスラム）、インド（タミール）、中国系、それぞれの小・中学校を見学し、その子どもたちの社会階層（SES）を測定するための予備的調査を各校の教員に依頼した。また、ペナンの日本人学校（全日制）では、在校生99名のバウムテストの結果を回収した。また上記研究所の主任研究員である、Dr. K. Loganatha Muttarayan と、臨床心理学準教授のDr. Shripati Upadhyayaとは種々の研究上の懇談を行ない、また、英文による「原風景調査」の実施を依頼して帰国した。

なお1984年9月から一年間研究休暇に入った。

4. 1985年5月26日から6月9日にかけて、アメリカ合衆国内に設置されている日本人学校のうち、下記の諸校を訪問・見学していわゆる「海外子女教育」の実状の一端にふれた。①ワシントン補習校、②ニューヨーク全日制日本人学校、③シカゴ全日制および補習校、④ロサンジェルス国際学園（全日制）、⑤ハワイ・レインボー学園（補習校）

## II 学会発表等

1. 1983年9月4～8日、大阪の普門館を主な会場として開催された The 10th World Congress of Social Psychiatryにおいて、シンポジウムの一つ“Conflict Resolution) のコーディネーター兼司会者として、日本人研究者5名、外国人研究者4名の発表・討議に参加したほか、個人発表の一会場でも運営委員の一人として司会を担当した。
2. 同9月10・11両日、東京神田のアジア青少年センターで開かれた日本「人間性」心理学会の第2回大会に参加し、一会場の司会を行なったほかワークショップ、評議員会に出席した。
3. 同9月12～14日に行われた日本心理学会第47回大会に参加し、最終日に行われた戸川行男早稲田大学名誉教授の特別講演会の司会・紹介者をつとめた。また理事会に出席した。
4. 同9月15・16両日、秋田県田沢湖高原の田沢湖ハイツで開かれた「人間主義心理学会」第6回研究会に参加し、「幼少期の原風景（その2：全国28短期大学1,000名の叙述の分析と解釈）」の発表を行なった。
5. 11月11～14日、中京大学で開かれた日本心理臨床学会第2回大会に参加し、第1日第3室の研究発表の司会を担当した。
6. 1984年2月8～10日、大阪の民族学博物館において行われた「特別研究：日本の文化の伝統と変容」にコメンテーターの一人として招かれ発言した。
7. 同3月17～19日、鹿児島市で行われた第9回コミュニティ心理学シンポジウムに参加し、「海外成長日本人の帰国適応と受入れ体制」に関して発表した。
8. 同4月27～28日に東京学芸大学で行われた異文化間教育学会第5回大会に参加し、特別研究課題「在日国際学校」にコーディネータ・司会者として参加し、アメリカン・スクール、カナディアン・アカデミー、および独逸学園からの報告とそれをめぐる討議を促進した。
9. 同5月23日、アメリカ・ボルティモア市のSheppard and Enoch Pratt Hospital で開かれた世界精神衛生連盟主催のシンポジウムに出席し、「日本における精神科医療と精神衛生対策の現状」について報告した。また、その後の2日間開催された同連盟の理事会に出席した。

## III 著作・論文

1. 「カルチュア・ショック」, 永野重史・依田明編:『発達心理学への招待7, 文化のなかの人間』, 215-255頁。
2. 「幼少期の原風景としての風土——(第2報)原風景の心理的測定法の検討——」  
『人類科学』35, 105-134頁(長谷川浩一との連名)
3. 「自己実現の学習:達成動機・向上心・意味・理想・機能的快感・解決の喜び・創造の喜び」(以上7項目), 小口忠彦編『新学習心理学基本用語辞典』, 明治図書, 100-104頁。
4. 「海外帰国児童・生徒受入れに関する小学校・中学校教師の意識調査」, 東京学芸大学海外子女教育センター研究紀要第2集, 21-54頁。
5. 「国際文化交流をさまたげるもの, うながすもの」, 季刊人類学, 14-2, 142-148頁。
6. 「(指名発言)『親と子の絆』の危機を乗り越えるために——イメージの重要性」, 河合隼雄・小林登・中根千枝(編), 『親と子の絆——学際的アプローチ』創元社, 164-172頁。
7. 「文化とパーソナリティ」, 河合隼雄ほか編, 『性格の科学』(講座現代の心理学6), 小学館, 153-187頁。
8. 「現代日本の若者の経験と動向をめぐって——青年心理学はどうかかわるか」, 『青年心理』43(1984.3), 40-52頁。
9. 「アジアの心理学(アジア地域の文化・思想と心理学)」, 西林忠恭・恩田彰・伊藤隆二(編), 『人間の心理学』第16章第1節, 八千代出版, 261-274頁。
10. 「疑問の多い“現代発達心理学”」, 『教育心理』32:8, 日本文化科学社, 50-53頁。

#### IV その他

1. 前年度に引き続き「『文化と人間』の会」の例会を1983年10月6日, 1984年1月28日, 4月1日に開催し, 異文化間心理学, 文化人類学などの研究者のフィールドワークなどの報告を会員12-20名とともに聴き, 討議を行なった。
2. 首都圏の言語・聴能障害のリハビリテーションと研究に従事している人びとの要請と原一雄教授と共有する関心に基き, 「言語障害研究会」を学内で2回開催した。
3. 日本人の異文化接触をめぐる次の2つの座談会に参加し, いずれも雑誌記事となった。①「日本の異文化接触——その諸問題」(川端末人・栗田靖之・谷泰・米山俊直の四氏と), 『季刊人類学』14-3, 1983, 112-173頁所収。  
②「異文化——子どもと親と」(中津燎子, 篠田有子, なみきみどりの三氏と), 『海外子女教育』1984-4, 38-46; 1984-5, 48-60頁。
4. 次の各大学に非常勤・臨時講師として出講した。  
① 聖心女子大学文学部教育学科「対人コミュニケーションの社会心理学」1983年度通年。

- ② 日本大学文理学部（一般教育）総合講座「自然と人間」（1983. 9. 20）
  - ③ 北陸学院短大保育科「幼児の精神衛生」（1983. 10. 15-17）
  - ④ 東京大学文学部心理学科「パーソナリティの心理学」（1983年度後期）
  - ⑤ 福島大学教育学部「異文化間心理学の意義と課題」（1984. 1. 28.）
5. 各種の講演・ワークショップ世話人の依頼に応じた。
- ① 日本生命済生会社会福祉部主催カウンセリング講座「カウンセラーの倫理」（1983. 10.11.）
  - ② 神奈川県立教育センター昭和58年度国際理解教育研修講座（専任コース）「教育の国際化と学校教育」（1983. 10. 25.）
  - ③ 東京文化学園 中学PTA, 「親と子の危機と絆」（1984. 1. 18）
  - ④ 科学警察研究所防犯少年部, 「ヒューマニスティック心理学について」（1984, 2. 16）
  - ⑤ 国際商科大学国際交流研究所「海外成長日本人の適応と将来」（1984.2.18）
  - ⑥ 立教大学社会学部IPR研究会第55回基礎及フォローアップトレーニング（1984. 2. 2-5, 3. 24・25）
  - ⑦ 横浜いのちの電話相談員研修上級講座「成人の心理臨床」（1984. 6. 25）
  - ⑧ 全日本カウンセリング協議会夏季カウンセリング・ワークショップ信州・白樺高原会場（1984. 8. 8-12）
6. 新しい課題, ボランティアワークとして1985年春に開局が予定されている「東京多摩いのちの電話」の研修委員の一人として「グループ体験学習」（全9回30時間）の一グループを本学教育学研究科出身の佐山董子修士と担当することになり, 1984. 6. 26から毎週1回の話合いと8. 21・22の合宿を重ねた。

## 都留 春夫教授

### I 研究活動

- (1) グループ・アプローチ  
「エンカウンター・グループにおけるリーダーの動きとメンバーの変化に関する研究」など。
- (2) フォーカシング  
リスナー・フォーカサー関係
- (3) カウンセリング  
「フォーカシング・アプローチのカウンセリングへの導入法について」など。

### II 学会発表など

- (1) 1983年9月10日, 日本人間性心理学会第2回大会（東京）においてワークショップ（フォーカシング）の講師をつとめた。
- (2) 9月15日, 日本フォーカシング研究会主催の研究会（東京）に出席した。

- (3) 11月12-14日, 日本心理臨床学会第2回大会シンポジウム「心理療法家にとっての治療理論」に提言者の1人として参加した。
- (4) 11月26日学生相談研究会(東京)のシンポジウム「大学カウンセリングの展開」に発題者として参加した。

### Ⅲ 著作等

- (1) 「スモール・グループ経験に及ぼすリーダーの影響」『心理臨床ケース研究 1.』(1983)日本心理臨床学会編, 3-21頁。
- (2) 「体験過程的アプローチ」『心理臨床学研究』Vol. 1. No.2. 1984. 24-28頁。
- (3) 「Rogers の PCA ワークショップ」『カウンセリング』Vol.15. No. 3 (1984), 1-5頁。
- (4) 「患者との出会い」『作業療法』Vol.3 No.1 (1984) 48-56頁。

### Ⅳ その他

- (1) 青山学院大学大学院講師「臨床心理学」担当(1984年1月まで)
- (2) 月例東京フォーカシング研究会・スタッフ
- (3) フォーカシング・セミナー・講師  
1984年7月11-13日(東京)日本・精神技術研究所
- (4) フォーカシング実習指導  
1984年3月8日。(市川)国立精神衛生研究所。
- (5) PCA合宿ワークショップ・スタッフ  
1984年1月31日-2月4日。(伊豆)PCAウイークエンドNo.86  
1984年8月28日-9月1日。(伊豆)PCAウイークエンドNo.92
- (6) エンカウンターグループ・ファシリテーター(広島)臨床的グループ・アプローチ研究会(CGAI)主催『みのちプログラム』1984年8月16-19日。
- (7) 講演
  - (a) 1983年1月24日「グローリアと3人のセラピスト」(東京)都立教育研究所
  - (b) 1983年12月1日 於上(第2回)
  - (c) 1984年2月25日「カウンセリングにおける体験過程」(水戸)人間関係研究所
  - (d) 1984年3月31日於上(第2回)
- (8) 月例カウンセリング研究会(土曜会)
- (9) カウンセリング
  - (a) 国際基督教大学カウンセリング・センター(チーフ・カウンセラー)
  - (b) 日本・精神技術研究所・心理臨床研究所(カウンセラー)
  - (c) 日本集団精神療法学会理事
  - (d) 大学基準協会・国際交流委員会委員

## 原 一雄教授

### I 研究活動

- 1) 脳波および誘発電位における大脳半球の機能的非対称性の研究
- 2) 喫煙行動の神経心理・精神薬理学的研究
- 3) 大学生の価値観研究——卒業生の追跡調査と他大学との比較研究
- 4) 国際基督教大学における教育活動の評価——教育プログラムの自己点検と教育環境アセスメント
- 5) 国際交流プログラムによる社会的態度の変容

### II 学会発表等

- 1) “The effects of nicotine intake on the hemispheric asymmetry of visually evoked potentials in the processing of visual information” アジア・太平洋州国際神経学会第6回大会（於台北）での“Higher cortical functions”に関するセッションに於て口頭発表を行った。（1983.11.16）
- 2) 日本生理心理学会第2回学術大会（於福井大学）でのシンポジウムII「生理心理学における動物実験の開発と展望」に於て、オーガナイザーと司会をつとめ、その席上、「皮質損傷実験の長短と功罪」について口頭発表を行った。（1984. 6. 3）
- 3) 日本動物心理学会第44回大会（於日本女子大学）にて「マウスの疲労耐性に及ぼすニコチン投与の影響」を口答発表1.セッションB-1の座長をつとめた。（1984. 7. 16）

### III 著作

- 1) 「マウスによる記憶の精神薬理・行動遺伝学的研究——ニコチン長期投与の迷路学習に及ぼす影響」文部省科学研究費補助金一般研究（B）課題番号545019 研究成果報告書。
- 2) （監訳）「喫煙——心理学および薬理学」（財）たばこ総合研究センター 265頁。
- 3) 「私大連盟における大学評価——自己点検その他」IDE：現代の高等教育 民主教育協会誌 No.252 13～18頁。
- 4) 「ICU在学生の職業的価値観の比較研究——20年前との比較」（笹田理恵子・石塚正一共著）国際基督教大学学報I-A 教育研究 26（1984），47～63頁。
- 5) 「ICUの教育的環境の調査研究——他大学との比較」（植田淳子・石塚正一共著）国際基督教大学学報I-A 教育研究 26（1984），65～83頁。
- 6) 「ICU在学生の人生観の調査研究——20年前との比較」（岩崎正子・石塚正一共著）国際基督教大学学報I-A 教育研究 26（1984），86～106頁。
- 7) 「マウスの逆転学習セットに及ぼすニコチン長期投与の影響 その2：多世代継続投与による薬物耐性」動物心理学年報 33（2），116頁。

### IV その他

- 1) 「IDE : 出会いの場」 IDE : 現代の高等教育 民主教育協会誌 No.246 (1983年11-12月号) 79~81.
- 2) 「『生活空間』と環境心理学」 TASCフォーラム TASC-Monthly No. 102, 4~7頁。
- 3) (講演)「私立大学の役割と課題」 関西学院大学教職員研修協議会(於関西学院大学, 1984.2.25)
- 4) (講演)「国際基督教大学における入試改革の試み」 国庫助成に関する私立大学教授会関東連絡協議会(於明治大学大学院, 1984.6.16)
- 5) 1984年4月~7月, 国際大学大学院国際関係学部にて「環境心理学」を講義。
- 6) 宇都宮大学教育学部附属養護学校における障害児の認知能力尺度の作成を前年度より継続。
- 7) 日本心理学会「心理学研究」, 「Japanese Psychological Research」誌の編集委員。
- 8) 日本基礎心理学会運営委員, 編集委員。
- 9) 日本生理心理学会運営委員, 副編集委員長, 英文アブストラクト委員。

## 栗山 容子助教授

### I 研究活動

1. 初期言語発達と象徴遊びの関連についての縦断的研究を継続して行なっている。象徴水準の設定及び定義についての明確化を試み, データによる裏づけが得られた。
2. 社会的相互作用の発達に関するデータのトランスクリプションの作成を行ない, 妥当な相互作用の分析方法を検討している。

### II 学会発表

1. 「初期言語発達と象徴遊びの発生(11)——発話の構文性の基準とその適用——」口答発表, 日本心理学会第47回大会, 1983.9.12-14, 早稲田大学, 発表論文集p.538。
2. 「初期言語発達と象徴遊びの発生(12)——初期発話の内容的特徴——」共同発表, 日本心理学会第47回大会, 1983.9.12-14, 於早稲田大学, 発表論文集p.539。
3. 「協同作業場面における子どもの社会的相互作用の発達」共同発表日本教育心理学会第25回総会, 1983.9.3-5, 於熊本大学 発表論文集p.364-365。

### III 著作

1. 「学習者自身による客観テストの作成と評価の試み」国際基督教大学学報I-A「教育研究26」, 1984.3. p.107-121

## 向井敦子助手

### 1. 研究活動



- (1) 幼児におけるひらがなの読みと書きに関する研究を手がかりにして、行動の発現・展開・終止の条件を探索している。
- (2) 3名の幼児・児童を対象にして、行動の形成と受容の過程を縦断的に観察している。
- (3) 対人行動を規定する条件を検討するための研究会活動を行っている。

## 2. 学会発表

- (1) 1983年9月、日本教育心理学会第25回総会において、「ひらがな文字の構成因の検討 IV. 文字対の変換過程と類似性 V. 幼児の書字過程の分析」を発表（同論文集p. 130～133）（斎藤舘・川瀬正裕・深谷澄男との共同研究、向井はVを口答発表）
- (2) 1983年9月、日本心理学会第47回大会において、「ひらがなの弁別・構成要因の検討 V. ひらがなの構成要因ごとにみた文字規定性について VI. ひらがな文字を構成する要因の重みについて」を発表。（同論文集p.225～226）（川瀬正裕・深谷澄男・斎藤舘との共同研究、向井はVI. を口答発表）

## 3. 著作

「行動体制の実現条件としての行動における連動的先導性と心理学的仕事」国際基督教大学学報I-A 教育研究, 1984, 26, p.123～151）（深谷澄男との共著）

## 4. その他

- (1) 1983年9月、対人行動学研究会第4回研究会において、研究発表部門の座長をつとめた。
- (2) 1984年1月、厚生省心身障害研究、母子相互作用研究班、第2回班会議総会に出席した。

## 視聴覚教育研究室

1983年 第20回日本視聴覚教育学会と第28回日本放送教育学会の連合大会が11月4～5日に、大阪大学人間科学部を会場として開催された。

自由研究は34件あり、シンポジウム及び課題研究は次のようなテーマで行なわれ、研究室から中野教授、阿久津教授、石本準教授、および大学院生が参加した。

シンポジウム：視聴覚文化とメディア教育

課題研究Ⅰ：放送利用による高等教育の現状と課題

課題研究Ⅱ：ソフトウェア開発をめぐる諸問題

1984年 修士課程終了者による論文発表会

	発表者	題 目
3月20日	武藤栄一	直接的教授における児童の統制の位置と認知および感情の関係 についての実証的研究
7月6日	岩佐玲子	マイクロコンピュータを用いた英単語学習の効果に関する実証 的研究
	重永悦子	映像文法と子供の理解度に関する実証的研究

### <人の動き>

青木恵子は非常勤助手を任期満了で3月末日に辞し、一方、赤枝紅子、北条礼子、神山正人、岩佐玲子、佐々木輝美、河合剛、野辺田洋子の7名が4月より非常勤助手に就任した。

なお、武藤栄一（元非常勤助手）は3月に、岩佐玲子と重永悦子は6月に、それぞれ修士課程を終えた。

### 中野照海教授

#### I 研究活動

- 1) 視聴覚教育の評価に関する研究
- 2) 文部省特定研究「科学博物館における体験的展示の教育構造と機能の開発に関する基礎的研究」研究分担者
- 3) 放送文化基金「放送教育50年の検証と新たな展望に関する調査研究」共同研究（編集局長）

#### II 学会活動など

- 1) 放送教育開発センター第3回シンポジウム「番組の制作変数について」、モデレーター、放送教育開発センター、1983年11月23日。
- 2) 日本視聴覚教育学会第20回大会課題研究「ソフトウェア開発をめぐる諸問題」、於大阪大学、1983年11月4日で発表。
- 3) 日本語学ラボラトリー学会、第24回年次大会基調講演「外国語教育における各種メディア利用の展望」於東北学院大学、1984年8月9日。
- 4) 日本教育学会第43回大会課題研究「ニュー・メディア時代の人間形成の変容と対策」において「思考の拡張と新たなシンボル・システムとしてのニュー・メディア」を発表、於甲南女子大学、1984年8月30日。

#### III 著 作

- 1) 「教育工学からみた21世紀の教育」『教育と情報』No286、1981年1月号、7-12（先回の記載にもれていた）
- 2) 「AVサイエンス、アート、テクノロジー」『AVサイエンス』153号、1983年12月、1-6.

- 3) 「評価における教育工学的技法の基本事項」『指導と評価』1983年11月号, 4-8.
- 4) 「すべての人からすべての個人へ」, 『LL通信』, 115号, 1984年2月, 1.
- 5) 「教育の多次元モデルのすすめ」, 『視聴覚教育時報』, 348号, 1984年2月, 1.
- 6) 「コンピュータ社会における教師の役割」『教育と情報』313号, 1984年4月, 7-14.
- 7) 座談会「視聴覚機器の現状と今後の展望」, 『学校・社会教育施設における視聴覚教育機器の現状』, 1984年6月, 7-13.

#### IV その他

- 1) 講義「放送の効果的活用」埼玉県教育センター, 1983年8月10日。
- 2) 講演, 「授業の設計と外国語教育」, ソニーLL研修会(於ICU), 1983年8月18日。
- 3) 講演「放送・視聴覚教材の活用と評価」, 長野県放送・視聴覚教育研究会(於更植市), 1983年10月14日。
- 4) 講義「視聴覚ライブラリーの新たな方向」全国視聴覚教育連盟研究会(於国立婦人教育会館), 1983年12月4日。
- 5) 講義「視聴覚教材の評価と活用」東京都立教育研究所, 1984年6月7日。
- 6) シンポジウム「情報化社会と教育」文部省視聴覚教育上級講座(於国立社会教育会館)1984年7月23日。
- 7) 講義「テレビ学校放送の効果的利用」埼玉県南教育センター, 1984年8月9日。
- 8) 学会等
  - a. 日本視聴覚教育学会常任理事, 同学会「視聴覚教育研究」編集委員
  - b. 日本放送教育学会常任理事, 同学会「放送教育研究」編集委員長
  - c. 「日本教育工学雑誌」(文部省・教育工学センター協議会, 邦文・英文) 常任編集委員, 編集幹事
  - d. 日本語学ラボラトリー学会評議員
  - e. 教育放送分科会(文部省社会教育審議会)委員
  - f. 「コンピュータと教育のあり方」小委員会(教育放送分科会)委員(主査)
  - g. 日本教育工学協会理事
  - h. 「視聴覚教育賞」(文部省・日本視聴覚教育協会)選考委員
  - i. 国立放送教育開発センター客員教授
  - j. NHK学校放送中央諮問委員会委員
  - k. 国立民族学博物館電算機委員会委員
  - l. 東芝教育技法研究会論文審査委員
  - m. AVCC理事・視聴覚教育国際協力委員会委員

## 阿久津喜弘教授

## 1. 研究活動

- (1)「学校内非行の原因およびその指導・対策に関する総合的研究」(昭和58年度科学研究費補助による総合研究)。なお、昭和57年度の研究成果については、その要約(32頁)を昭和58年10月に刊行。
- (2)「新・教育社会学辞典」の共同編集。
- (3)現代教育研究会および日本文化会議コミュニケーション研究会の一員としての研究活動。

## 2. 著作

- (1)「メディア社会におけるマス・メディア教育の問題点」『教職研修』12巻1号、1983年9月、74-77頁。
- (2)「情報の調整指導の重要性」『教職研修』12巻4号、1983年12月、28-30頁。
- (3)「社会教育の理論——情報理論の視座」伊藤俊夫他編『新社会教育事典』第一法規、1983年12月、21-26頁。
- (4)『校内暴力解決のための研修手引』(J. S. リチャードソン著、共訳)学校改善研究会、1984年1月。

## 3. その他

- (1)日本教育社会学会理事・国際交流委員会委員長。
- (2)日本視聴覚教育学会理事・編集委員。
- (3)日本放送教育学会理事・編集委員。
- (4)三鷹市社会教育委員。
- (5)第4回大学院共同セミナー「ヘブライズムとヘレニズム——合理性と非合理性の問題をめぐって」(大学セミナー・ハウス、1983年7月1日-3日)の運営委員。
- (6)講演「社会関係をつくるコミュニケーション」三鷹市公立学校PTA合同研修会(三鷹市教育センター、1983年11月30日)。
- (7)講義「人間関係とコミュニケーション」横浜市職員研修(横浜市社会福祉センター、1983年12月15日)。

## 石本菅生準教授

## I 研究活動

- 1 語学教育用のCAIプログラムに関する実験的研究
- 2 教育学・視聴覚教育知識データベースに関する研究
- 3 大学入試における学力テストと能力テストの比較研究
  - 第四班：入試研究のための分析プログラムシステムの試作(実施責任者)
  - 第一班、第三班への資料の作成と提供(協力者)

## II 著作

## 1 大学入試における学力テストと能力テストの比較研究

第4章 SPSSを用いた入試研究のための分析プログラムシステムの試作

2 マイクロコンピュータを用いた英単語学習に関する実証的研究(岩佐玲子と協同)  
教育研究, 27

## Ⅲ その他

日本視聴覚教育学会 常任理事

日本教育工学会 設立発起会員

日本放送教育学会 会員

日本教育工学雑誌 編集委員

日本視聴覚教育学会第21回大会の自由研究発表(CAI部会)の司会者

**理科教育法研究室**

滝川洋二君が学位論文「授業分析にもとづく自然認識の過程の研究——力学の学習を例として」の審査にパスして、本学における博士第1号として1984年3月19日に教育学博士を授与されたことは、理科教育法研究室にとり特筆大書すべき出来事であった。

多年当研究室を指導してこられ、上記博士論文審査委員会の主査を勤められた柿内賢信大学院教授が1984年3月末をもって定年退職されたことは、当研究室にとって大変残念ではあったが、幸いにも同教授は1984年4月以降も引続き本学非常勤講師として当研究室の教育・研究の指導に当たって下さることとなった。

同教授および田坂興亜準教授を中心に、理科教育に関するセミナーが毎週開かれて、ICU関係者だけでなく学外からも常時参加者があり、活発な研究討議を行なっている。

勝見允行教授は研究休暇を終えて1984年9月から復帰されたが、入れ替りに石川光男教授が1年間の研究休暇に入った。

**柿内賢信教授****I 研究活動**

小学校低学年における理科学習の分析

帰納の構造に関する研究

**II 学会発表**

1983・6・16「帰納の構造について」

科学基礎論学会

1984・1・2「Learning Physics through

Experiment」International Conference on Physics Education,

Jaipur India.

### Ⅲ 論文

わかるための教育へ向けて, 雑誌「悠」創刊準備号, 1983, 11, p.42。  
Learning Physics through Experiment Report of the Conference of  
Jaipur (in Press)

### Ⅳ その他

講演: 科学と信仰 (1983・10・18)

恵泉女子短大園芸学科

講演: 科学と信仰 (1984・2・10)

鷗友学園専攻科

Radio Interview: On Noh Drama, Recorded on January 3  
(Radio Bangkok)

報告: 中央教育審議会教育内容小委員会において「理科」について報告 (1983・  
12・6)

講演: Language, Knowledge and Society, ICU convocation hour (1984・  
2・23)

### 団体役員

財団法人促進会理事長

宗教法人宗教音楽研究所理事

一般教育学会理事

学校法人音羽幼稚園理事

## 三宅 彰教授

### I 研究活動

前年度に引続き, 鎖状高分子に関するくりこみ群の方法の応用を進展させて濃度依存性を論じ, また星形高分子の場合についてその特徴を研究した。

1984年の夏休みを利用して7月11日～30日に米国へ旅行し, 同12日～14日はStockmayer教授満70歳祝賀シンポジウム(ダートマス大学)に出席して講演, 同15日～20日は高分子物理に関するGordon Research Conference(プロクターアカデミー, ニューハンプシャー州)に参加, 同21日～29日はシカゴ大学ジェームス・フランク研究所に短期研究のため滞在した。

### II 学会発表等

- 1) 星形高分子の内部形態, 日本物理学会分科会(岡山大学), 1983年10月12日
- 2) 星形高分子の形態と排除体積, 高分子討論会(金沢大学), 1983年10月13日
- 3) 星形高分子の排除体積, 第11回武蔵野地区高分子懇話会(ICU), 1984年1月26日

- 4) 高分子鎖の拡がりの濃度依存性, 昭和58年度科学研究費(総合研究A)「高分子の集合体形成と機能発現機構に関する理論的研究」研究会(箱根), 1984年1月30日~2月1日
- 5) 星形高分子の散乱関数, 日本物理学会年会(九州大学), 1984年4月4日
- 6) 高分子鎖内部拡がりの濃度依存性, 高分子学会年次大会(名古屋), 1984年5月30日
- 7) Excluded Volume Conformations of Star Polymers, Stockmayer 70th Birthday Symposium, Dartmouth College, Hanover, N. H., July 13, 1984
- 8) Excluded Volume Conformations of Star Polymers (K. F. Freedと連名), 高分子学会主催第1回国際高分子会議(京都), 1984年8月21日

### Ⅲ 著作・論文

- 1) 三宅彰: 高分子鎖の拡がり——平均場近似からくりこみ群まで, 月刊フィジクス 4巻9号(1983) 532-538頁
- 2) 高分子準濃厚系とくりこみ群の方法(57540193) 昭和57, 58年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書(研究代表者星野義昭), 昭和59年3月, 7-35頁
- 3) A. Miyake and K. F. Freed: Internal Chain Conformations of Star Polymers, *Macromolecules*, 17 (1984) 678-683
- 4) A. Miyake: Scattering Functions of Star Polymers, *Repts. Progr. Polymer Phys. Japan*, 27 (1984)
- 5) A. Miyake: Internal Chain Conformations in Semidilute Solutions, *Repts. Progr. Polymer Phys. Japan*, 27 (1984)

### Ⅳ その他

財団法人大学セミナーハウス常務理事, 評議員

## 石川光男教授

### I 研究活動

1. 生体高分子に対する放射線効果
2. 理科教育における総合的評価法の開発と分析
3. 大学教育におけるマークカード利用の評価法
4. 科学と宗教に関する学際研究

### II 学会発表等

1. 大学教員懇談会(1983年10月8日, 東京): 大学入試における多次元的评价
2. 第5回学際研究会議(1983年12月10日, 東京): サイ情報系と科学
3. 日本意識工学研究会(1984年7月27日, 東京): ニューサイエンスの意味するもの

### Ⅲ 著 作

1. 「東洋的生命観と学問」, 三信図書, 1983年12月22日, 242頁
2. Single Strand Breaks in Supercoiled DNA Caused by. X-Rays and Far-UV Radiations, K.Takakura, M. Ishikawa, Report Progr. Polymer Phys. Japan, 26, 683 (1983)

### Ⅳ そ の 他

1. 連載: 「東洋文化と科学」, 『新天地』, 1983年8月-1984年5月
2. 連載: 「科学と宗教の世界観」, 『宗教新聞』, 1984年1月-8月
3. パネルディスカッション: 「精神世界探求の共通広場を求めて」, 精神世界全国会議, 東京, 1984年6月23日
4. 対談: 「物質と意識の相互作用」, 『たま』, 1984年, 6月
5. 講演: 「精神世界に近づく科学」, 心霊研究夏季講座, 東京, 1984年8月26日
6. エッセイ: 「受験に失敗しない方法」, 『大学進学ジャーナル』, 1984年, 8月
7. パブリックヘルスリサーチセンター評議員

### ドナルド・C・ウォース教授

#### 1. *Research Activities:*

##### A. *Solar Energy Studies—*

1. Study of performance of concentrating solar collector of new design.
2. Study of possibilities of application of solar energy to the photolysis of water.

##### B. *Microcomputers In Physics Teaching—*

1. Study of the ways of applying microcomputers as teaching aids in the physics lecture and laboratory.

#### 2. *Papers Read In Academic Meetings During This Period—*

None

#### 3. *Publications During This Period—*

1. “*Development of The Energy Concept—NOTES*” (ICU General Education Series, No. 18, 1984)

(A partial text for the general education course, “Foundations And Concepts of Physics” (NS II), to supplement a previous (1981) publication, “Development of The Energy Concept—Landmark Papers” .)

#### 4. *Others—*

None



## 勝見允行教授

### I 研究活動

1983年9月より1984年8月まで研究休暇。前半は、本学に於て、新植物生長調整物質ブラシノステロイドの作用型について研究。後半はUCLAにて、客員研究員として、ジベレリン非感受性矮性トウモロコシ (D-8) の内生ジベレリンについて研究。

昭和58年度文部省科学研究費補助金総合研究A「水ストレスのeffector系としての植物ホルモンの動態」・分担研究

昭和58年度文部省科学研究費補助金特定研究「多細胞体制の形成機構」分担研究

### II 学会発表

- 1) ホモブラシノライドの生理作用 1. 伸長促進効果, 植物化学調節研究会昭和58年度大会, 名古屋
- 2) M. Katsumi, H. Yamane, N. Takahashi and B. O. Phinney-Gibberellin (GAs) and GA-like substances from normal and Dwarf-8 maize. Annual meeting of the American Society of Plant Physiologists, Aug. 1984, Davis, Calif.

### III 著作

- 1) H. Kazama and M. Katsumi, Gibberellin-induced changes in the water absorption, osmotic potential and starch content of cucumber hypocotyls. *Plant Cell Physiol.* 24 : 1209-1216 (1983)
- 2) 植物の生長とその調節, 化学と工業 37 : 86-89. (1984)
- 3) 勝見允行・増田芳雄・植物ホルモンによる細胞生長の制御—糖代謝を中心にして, pp.201-221「人類の生存と植物生産・田村三郎・高橋信孝編」東京大学出版会 (1984)

### IV その他

- 1) 百科年鑑 (平凡社) 1984, 生物学項目編集, 2項目執筆
- 2) ウェントからパールへの手紙—植物ホルモン発見の優先権—採集と飼育40 : 98-99 (1984).
- 3) 植物ホルモンの化学と生理. ソフィア21別巻2, pp. 232-233 講談社 (1984).

### III 学会等役員

日本植物生理学会編集委員, 同評議員。

植物化学調節研究会編集委員。

International Plant Growth Substances Association, Advisory Council, member.

## 山口俊夫教授

### I 研究活動

## 1) 骨格筋の興奮収縮連関について。

フグ毒を投写して興奮性を失った骨格筋から薬物を洗い去る。この筋細胞の回復過程にみられるLATE AFTER POTENTIALを調べ収縮との関連を調べた。

## 2) 除神経昆虫筋細胞のグルタメート感受性について。

昆虫の神経を切断するとその支配筋のグルタメートリセプターが筋細胞膜全体に広く分布するようになるといわれている。この現象を種々の濃度のグルタメートを投写して生ずる収縮の大きさから推論しようとする。

## II 学会発表等

骨格筋細胞の興奮収縮連関とLATE AFTER POTENTIAL

第61回日本生理学会大会 1984, 3月28-30日 前橋

## IV その他

私が見た現在の学生像

福音時報 (1984年3月号)

## 田坂興亜準教授

## I 研究活動

- a. 奇形発生の続いている淡路島モンキーセンターのサルの餌に残留する農薬の分析。
- b. タイと日本の米に残留する農薬の分析。
- c. タイの教員養成大学における実験の導入による理科教育の改善。

## III 技術移転手法事例研究「理科教育に関する専門家活動報告(タイ)」国際協力事業団, 国際協力総合研修所刊, 1984年3月。

## 英語教育研究室

1. 1983年12月21日(水) 1~4 p.m. UCLAの日本語科準教授, 赤塚のり子氏の講演「条件文について」。約100名参加。
2. 1984年6月8日(水) 1:30~3:30p.m. MIT言語学教授, Wayne O'Neil氏の講演, "Grammatical relation in the history of English", 大学院生等約30名参加。
3. 1984年6月15日(水) 2:30~4:30p.m. University of Arizonaの教授, 北川千里氏の講演「日本語のcase-markingについて」。約25名参加。
4. 1984年8月23日(木), 24日(金), 八王子の大学セミナーハウスにて, 英語教育専攻の大学院生, 同卒業生, 語学科の学生等, 約30名参加。
5. 1984年8月28日(火), 6~8 p.m. University of Massachusetts, Amherstの助教授, 長谷川のぶ子氏の講演, 「GB理論について」。

大学院学生等、約25名参加。

文部省科学研究助成金（班長：井上和子）による。

6. 1984年8月28日（火）、29日（水）、第23回ICU夏季言語学研究会が理学館に於て開かれる。約200名参加。語学科主催。
7. 1984年8月29日（水）～31日（金）、University of Connecticut準教授Howard Lasnik氏の連続講義“Current issues in theories of syntax and logical form”が、理学館に於て開かれる。約100名参加。東京言語学セミナーICU分会主催。

## 井上和子教授

### I 研究活動

- (1) 文部省科学研究費，特定研究『情報化社会における言語の標準化』の「明確で論理的な日本語の表現」研究班，研究代表者（談話の結束性と「卓立の原理」）
- (2) 文部省科学研究費，特定研究『学術動向の調査研究』「言語学班」研究代表者
- (3) 文部省科学研究費，特定研究「学術用語の調査研究」研究分担者（新言語学の学術用語中，統語，構造，GB理論などの領域の用語担当。）
- (4) 吉田秀雄記念事業財団研究助成，「広告の言語学的研究」研究分担者

### II 学会発表等

- (1) 放送文化基金報告会『放送とことば』「日本語の談話構造」1983年10月29日
- (2) 「日本語文法の問題点—『が』について」1983年11月5日 関西言語学会特別講演
- (3) 「生成文法理論の定式化の変遷」 学術振興会「学際的研究小委員会」1983年11月7日
- (4) 「日本語文法と談話構造」国立国語研究所 1983年12月15日
- (5) “Problems related to ‘ga’ marking in Japanese,” The Ohio State University, 1984年4月6日
- (6) 日本英文学会シンポジウム，“Passive,” 司会，1984年5月13日
- (7) “Case Marking and Property Reading,” Nitobe-Ohira Memorial, Conference on Japan Studies, University of British Columbia, 1984年5月24日
- (8) ICU夏季言語学研究会，パネルディスカッション，『日本語文法研究の現状と展望』「GB理論から見た日本語研究」1984年8月28日

### III 著作

- (1) 「日本語の伝聞表現とその談話機能」『言語』1983年1月号，113-121
- (2) 「文—文法と談話文法の接点」『言語研究』84，17-44，1983年（autumn）
- (3) “A Lexicalist Grammar of Japanese,” in Inoue, Linde, Kobayashi

(eds.) *Issues in Syntax and Semantics, Festschrift for Masatake Muraki*. 35-64.

- (4) 「文-文法から談話文法へ」『言語』1983年12月, 38-46.
- (5) 「文の複雑さと理解」(安井美代子と共著), 井上和子編『明確で論理的な日本語の表現』1-25
- (6) 『国語年鑑』「展望-言語学」18-20, 1984年7月  
(編集)
- (7) *Proceedings of the XIIIth International Congress of Linguists* (服部四郎博士と共編) 1983年12月, プロシーディングズ刊行委員会.
- (8) *Issues in Syntax and Semantics, for Masatake Muraki*, (R. Linde, E. Kobayashiと共編) 三修社, 1983年12月.
- (9) 『明確で論理的な日本語の表現』1984年3月.  
(翻訳)
- (10) 「ことばと認識」(原著, 1980) Noam Chomsky, *Rules and Representations* (神屋昭雄, 西山佑司と共訳) 1984年4月, 大修館.

#### IV その他

- (1) 「思い出に残る先生たち」『教育だより』東京都教育研究所
- (2) 文部省学術審議会委員, 1978~
- (3) ユネスコ国内委員, 1978~
- (4) 国際言語学者常置委員会 (CIPL) 実行委員会委員, 1982~
- (5) 東京外国語大学アジアアフリカ研究所運営委員, 1978~
- (6) 日本言語学会会長, 1983~
- (7) *Linguistics* (published by Mouton) の編集委員, 1981~
- (8) *Natural Language and Linguistic Theory* (published by D.Reidel Publishing Co.) の編集委員, 1982~
- (9) *Papers in Linguistics* (The University of Alberta) の編集委員, 1982~
- (10) 大学英語教育学会評議員, 1974~  
大学基準協会入試委員会委員, 1970~

#### 村木正式教授

##### I 研究活動

- a. Montague Grammar, Generalized Phrase Structure Grammar による日本語の文法範疇の設定
- b. 変形によらない受動文の分析, とくに無動作主受動文の生成

##### II 学会発表等

1984年3月31日(土), 「日本語の句構造分析について」, 論理文法研究会シンポジュ

ーム, 上智大学。

1984年5月24日(木), "On Syntactic Categories of Japanese", Panel #5: Japanese Linguistics and Language, Nitobe-Ohira Memorial Conference, University of British Columbia, Vancouver, Canada.

1984年8月28日(火), 「Agentless PassiveのCategorial Analysis」, シンポジウム: 日本語文法研究の現状と展望, 第23回ICU夏季言語学研究会。

### Ⅲ 著作等

1983, 「談話研究のキーワード」, 『月刊言語』第12巻第12号。

1983, "In defense of Equi NP Deletion", *Papers in Japanese Linguistics*, 9 : 119-128, Tokyo: Kurosio Syuppan.

1983, "Report: Working Group: Characteristics of Japanese expressions in news reporting (Organizer: M. Muraki, Discussants: I. Hirata, K. Inoue, K. Okutsu, M. Sagawa, M. Shibatani)", *Proceedings of the 13th International Congress of Linguists, August 29 - September 4, 1982, Tokyo*, eds.: S. Hattori, K. Inoue, T. Shinomiya, Y. Nagashima, pp. 1385-1389.

1983, (Coauthor: Matsuo Soga), "Patterns of errors among intermediate and advanced students", *Journal of the Association of Teachers of Japanese*, 18 : 1 : 7-22.

1983, 「書評: 太田朗著(1980)『否定の意味—意味序説』, 大修館書店」, 『英語学』, 第25巻, pp. 104-125.

1984, 「書評: 安井稔他著(1983)『意味論(英語学体系第5巻)』, 東京: 大修館書店」, 『英語青年』, 1984年5月号, pp. 130. 90-91.

1984, 「日本語の統語範疇設定の手順について」, 井上和子編『明快で論理的な日本語の表現(昭和58年度文部省特定研究(1))』, pp. 33-38.

1984, "Phonological analysis of Japanese verbs", *Kyooiku-kenkyuu Educational studies*, 26 : 181-189. Tokyo: ICU.

To appear, "Syntactic categories in Japanese".

To appear, "Categorial analysis of passivization and reflexivization".

### Ⅳ その他

日本英語学会評議員, 編集委員; 論理文法研究会幹事; 日本言語学会事務局長

#### 小林栄智教授

##### I 研究活動

1. 古英語散文の構文
2. 中英語詩の構文

## 3. 高校英語教材

## II 書 評

1. 「松浪有・池上嘉彦・今井邦彦編,『大修館英語学事典』,『週刊読書人』No. 1506, 1983, p. 4.
2. 「英語学研究:松浪有博士還暦記念論文集」,同論集編集委員会編,478頁,秀文インターナショナル,1984,『言語』vol. 13, No. 8, 1984, p. 132.

## III その他

1. 「英語研究室:名作ゆかりの地を訪ねて」,『ハイスクール・ニーズ』vol. 7, No. 1, 1984, 学校図書, 6-8.
2. 「新高校英語Why English I, II」  
「新高校英語Read English II-B」  
「新高校英語Write English II-C」  
以上共著, 学校図書, 1982-1984
3. 講演:「英語と私」関東甲信越英語教育学会第7回研究大会, 1984年8月10日, 於:長野市, 信濃教育会館
4. 「English, Of Course」(共著), 三修社(印刷中)

## F. C. パン教授

## I. 研究活動

As usual, my research in this academic year was divided into three areas: (1) Linguistics (including Sociolinguistics and Historical Linguistics), (2) Neurolinguistics, and (3) Sign Language. The first area focussed on discourse analysis, the context of situation, and the reconstruction of Proto-Japanese in relation to Dravidian and Austronesian languages. I also finished about one half of my textbook 言語社会学 (about 200 printed pages of an approximately 400-page book). For this area of research, I went to Poznan; Poland, for the VIth International Conference on Historical Linguistics, where I presented a paper, (August 22-26, 1983). The second area, since I was on leave, took me to a couple of conferences (XIX Congress of the International Association of Logopaedics and Phoniatics, Edinburgh, August 14-18, 1983, and the Tenth LACUS Forum, in Quebec City at Laval University, August 7-11, 1983) in the summer as well as to the 6th Asian and Oceanian Congress of Neurology in Taipei, Taiwan (November 13-17, 1983) where I organized the Session on Higher Cortical Functions, served as Chairman, and presented a paper. The Proceedings of this session (along with that of the 5th

ICU Conference on Neurolinguistics) will come out next year as the first volume of a new journal, *Higher Cortical Functions*, of which I will also be Editor. The third area also took me to Rome, for the Third International Symposium on Sign Language Research, June 22–26, 1983, where I presented a paper, which will appear in the Proceedings later, edited by William Stokoe and Virginia Volterra. In connection with this area of research, and for the purpose of observing the Chinese Sign Language used in Hong Kong, I was invited to participate in the Third International Symposium on Psychological Aspects of the Chinese Language (July 2–5, 1984). The work on the compilation of a Japanese Sign Language Dictionary, for which an agreement has been made with the Bunka Hyoron Publishing Company of Hiroshima, is now officially under way; I plan to complete this work in five years, with the target date of publication set for 1989.

In spite of my leave, I also organized the annual events of: (1) The 7th ICU Language Sciences Summer Institute (July 25–29, 1983), (2) The 7th ICU Conference on Child Language (July 24, 1983), (3) The 9th ICU conference on Sociolinguistics (July, 1983), (4) The Third International Conference on the Language Sciences (Theme: Language and the Child, July 24, 1983), and (5) The 5th ICU Conference on Neurolinguistics (November 19–20, 1983).

## II . 学会発表等

“Some Morphological Considerations of the Japanese Sign Language,” (June 23, 1983) at the Third International Symposium on Sign Language Research, Rome, Italy.

“The Child’s Acquisition of Sound Patterns: Can It really be Studied as Child Phonology?” (July 24, 1983) at the Third International Conference on the Language Sciences.

“On the Possible Clusters of mb, nd, and ng in Proto-Japanese” (August 24, 1983) at the VIth International Conference on Historical Linguistics.

“The Future of the Study of Higher Cortical Functions in Asia and Oceania” (November 16, 1983) at the 6th Asian and Oceanian Congress of Neurology.

## III . 著 作

1. 「言語社会学とは何か (上)」『言語』 1983, 5月号 pp.92–6 .

2. 「言語社会学とは何か (下)」『言語』 1983, 6月号 pp.94—9.
3. 「言語社会学の扱う範囲」『言語』 1983, 7月号 pp.92—8.
4. 「言語社会学が扱う言語の機能的側面」『言語』 1983, 8月号 pp.84—9.
5. 「談話分析」『言語』 1983, 9月号 pp.88—94.
6. 「呼称法体系」『言語』 1983, 10月号, pp.100—5.
7. 「記号間の相互関係」『言語』 1983, 11月号 pp.106—12.
8. 「言語社会学の将来性」『言語』 1983, 12月号 pp.98—103.
9. *Language Sciences*, Editor, Vol. 5, No 1, 1983.
10. *Language Sciences*, Editor, Vol. 5, No 2, 1983.
11. “The Child’s Acquisition of Sound Patterns: Can It Really be Studied as Child Phonology?” *Language Sciences*, 6. 107—28.
12. *Language Sciences*, Editor, Vol. 6, No 1, 1984.
13. *The Dynamics of Language (言語のダイナミックス)*, edited with Koji Akiyama and Tomihide Kondo, Hiroshima: Bunka Hyoron Publishing Company, 1984.

## 2. 大学院教育学研究科修士論文

### 1984年3月卒業者 17名

#### A. 教育哲学

- |       |   |
|-------|---|
| 芦田 玲子 | 現代日本の学力論と到達度評価に関する一研究                                     |
| 伊佐 直子 | ジョン・デューイの人間観<br>—宗教観を中心として—                               |
| 松浦 良充 | ロバート・M・ハッチンズの教育思想の研究<br>—教育思想史におけるリベラル・<br>エデュケーションの研究序説— |

#### B. 教育心理学

- |       |                                      |
|-------|--------------------------------------|
| 黒崎 祐子 | 児童の文章理解力に関する発達的研究<br>—説明文の構造的分析を通して— |
| 高橋 佳子 | エンカウンター・グループの効果と対人イメージの変化            |

#### C. 視聴覚教育法

- |       |  |
|-------|--|
| 武藤 栄一 | 直接的教授における児童の統制の位置と認知<br>および感情の関係についての実証的研究 |
|-------|--|

#### D. 英語教育法

- |       |  |
|-------|--|
| 本田 恵子 | <i>Learning Problems Found in English Learning: Common</i> |
|-------|--|



- Errors Found in the Uses of Basic Verbs Taught in English Class
- 嘉部 淑子 A Study in Japanese Quantifier Float: in Contrast to English Quantifier Float
- 熊谷 滋子 Activo-passives as Potential Intransitive Verbs in English
- 那須 理香 Analysis of Japanese Locatives
- 中島智恵子 The Difference in English Pronunciation of Japanese Students between the Ideal and the Reality
- 西田 法子 The Effect of Sentence Connectives on Reading Comprehension
- 斉藤くるみ The Old English Nominal Modification in King Alfred's *Pastoral Care*
- 篠原 和子 Sociology of English Teaching in Japan - Research on the Motivation of Teaching English to Preschool Children-
- 谷口 早苗 A Study of Passive Perception Verbs in English
- E. 理科教育法**
- 富沢千代子 学習における熱概念の生成過程
- 釣井賢一郎 理科教育における教師実験の効果的導入に関する一考察
- 1984年6月卒業者 7名**
- A. 教育哲学**
- 守屋美佐子 対話的原理に関する一考察  
—M. ブーバーを中心にして—
- B. 教育心理学**
- 永井 史 精神分裂病の疑いをもたれた学校に行けないある中学生の事例
- C. 視聴覚教育法**
- 岩佐 玲子 マイクロコンピュータを用いた英単語学習の効果に関する実証的研究
- 重永 悦子 映像文法と子供の理解度に関する実証的研究  
—ズームとクローズアップ・ロングショットを中心にして—
- D. 英語教育法**
- 近藤 富英 An Integrated Discourse Analysis from the Viewpoint of Communicative Distance
- 大西 幸子 Verb-complement in Alfred's *Pastoral Care*
- 吉田 智行 Focus vs. Presupposition and the Target of Negation

### 3. 教育実習報告

1983年度教育実習には102名の学生が参加した。その詳細は次のとおりである。

#### 1. 実習生総数 102名

男子 21名

女子 81名

#### 2. 実習日程

- 5月9日～5月21日 国分寺市立第一中（東京）、静岡大学教育学部附島田中（静岡）
- 5月23日～6月3日 恵泉女学園中（東京）
- 5月23日～6月4日 関東学院六浦中・高（神奈川）
- 5月23日～6月6日 鎌倉市立大船中（神奈川）
- 5月26日～6月8日 県立長野西高（長野）
- 5月27日～6月9日 県立土浦第一高（茨城）
- 5月30日～6月11日 ICUHS, 渋谷区立松濤中, 立正高（東京）, 県立新潟高（新潟）, 釧路湖陵高（北海道）, 県立松本深志高, 県立長野高（長野）, 県立瀬谷高（神奈川）, 県立富山高（富山）, 市川市立第一中（千葉）, 海老名市立大谷中（神奈川）, 同志社国際高（京都）, 新島学園高（群馬）
- 5月30日～6月12日 小金井市立南中（東京）
- 5月30日～6月13日 学習院女子中・高（東京）
- 6月1日～6月14日 県立大洲高, 松山東雲高（愛媛）, 桜蔭中（東京）, 県立三条高（新潟）, 県立甲府西高（山梨）, 梅光学院高（山口）
- 6月3日～6月16日 東京工業大工学部附属工業高（東京）
- 6月6日～6月18日 目黒区立第四中, 世田谷区立山崎中, 足立区立第六中, 八王子市立横川中, 立川市第五中, 武蔵野市立第二中, 三鷹市立第二・三中, 都立市ヶ谷商業高, 都立町田高, 都立立川高, 都立福生高, 武蔵野女子学院高, 東邦大附東邦高, 東京学芸大附高（東京）, 県立鶴丸高, 県立加治木高（鹿児島）, 三島市立北中, 小田原市立城北中, 静岡英和女学院高（静岡）, 県立鶴見高, 県立泰野南ヶ丘高, 鎌倉市立深沢中（神奈川）, 高崎市立第四中, 県立沼田

- 女子高（群馬），県立茨城高（茨城），県立玉名高（熊本），所沢市立富岡中（埼玉），岡山操山高（岡山），北陸学院高（宮城），県立磐城女子高（福島），九州女学院高（熊本）
- 6月13日～6月24日 横浜共立学園中，フェリス女学院中（神奈川），浦和ルーテル学院（埼玉）
- 6月13日～6月25日 女子学院中（東京）
- 6月13日～6月28日 県立上田高（長野）
- 6月14日～6月25日 松戸市立根木内中（千葉）
- 6月14日～6月28日 広島大附中・高（広島）
- 6月17日～6月30日 女子聖学院中・高（東京）
- 6月20日～7月2日 県立済々黌高（熊本）
- 6月26日～7月8日 西南女学院高（福岡）
- 6月27日～7月9日 東北学院中・高（宮城）
- 7月4日～7月16日 横浜国立大教育学部附鎌倉中（神奈川）
- 9月1日～9月14日 邑久町立邑久中（岡山），名古屋市立菊里高（愛知），東京純心女子高（東京）
- 9月2日～9月16日 都立千歳高（東京）
- 9月2日～9月17日 県立高鍋高（宮崎）
- 9月3日～9月17日 梅花中・高（大阪）
- 9月5日～9月17日 府立枚方高（大阪），県立豊橋南高（愛知）
- 9月12日～9月24日 小金井市立第二中（東京）
- 9月17日～9月31日 フェリス女子学院中（神奈川）
- 9月26日～10月7日 サンモールインターナショナルスクール（神奈川）
- 10月4日～10月21日 立教女学院中（東京）
- 10月11日～10月22日 泰野市立西中（神奈川）
- 10月17日～10月28日 フェリス女学院中（神奈川）
- 10月26日～11月11日 神戸女学院高（兵庫）
- 11月7日～11月18日 東洋英和女学院中（東京）

## 3. 学科別

学科 \ 性別	男	女	計
人文科学科	1	13	14
社会科学科	4	9	13
理 学 科	2	5	7
語 学 科	11	32	43
教育学科	2	16	18
教育学研究科		2	2
行政学研究科			
比較文化研究科		1	1
聴 講 生	1	3	4
合 計	21	81	102

## 4. 教科別

教科 \ 性別	男	女	計
社 会	4	7	11
理 科	2	5	7
数 学		1	1
英 語	15	67	82
宗 教		1	1
合 計	21	81	102

## 5. 教員免許状取得状況

1984年3月卒業生358名（学部324名，大学院34名）中，教員免許状を取得した学生（聴講生は除く）の詳細は次のとおりである。

## 教養学部

学 科	免許状取得者 実 数	中 学 校 教 諭 一 級 免 許 状	高 等 学 校 教 諭 二 級 免 許 状
人文科学科	9	8	10
社会科学科	9	10	10
理 学 科	4	5	4
語 学 科	38	33	38
教育学科	14	13	14
合 計	74	69	76

学 科	社 会		理 科		数 学		英 語		宗 教	
	中学 一級	高校 二級	中学 一級	高校 二級	中学 一級	高校 二級	中学 一級	高校 二級	中学 一級	高校 二級
人文科学科							7	9	1	1
社会科学科	6	6					4	4		
理 学 科			5	4						
語 学 科							33	38		
教育学科							13	14		
合 計	6	6	5	4			57	65	1	1

### 大学院

教育学研究科	理科教育法	2
	英語教育法	3
行政学研究科		
合 計		5

### 6. 教員就職状況

公立中学校： 女1名（英1）  
 公立高等学校：男4名（英4） 女8名（英8）  
 私立高等学校：男3名（理1，英2） 女10名（英10）

## 4. ひ と の う ご き

### ■新任・就任

Berbara B. Bunker（招聘準教授）（社会心理学）

フルブライト招聘準教授としてニューヨーク州立バッファロー  
 大学より来任。84年4月より12月迄。

室山 晴美助手（非常勤）（心理学）：84年4月より着任。

鈴木 奈保子助手（非常勤）（心理学）：84年4月より着任。

赤枝 紅子助手（非常勤）（視聴覚教育）：84年4月より着任。

河合 剛助手（非常勤）（視聴覚教育）：84年4月より着任。

北条 礼子助手（非常勤）（視聴覚教育）：84年4月より着任。

野辺田洋子助手（非常勤）（視聴覚教育）：84年4月より着任。

村木 正武教授（言語学）84年4月：教育研究所長に就任。

石本 菅生準教授（視聴覚教育・教育学・計算機科学）83年9月：教育学科長に  
 就任。84年4月再任。

川瀬 謙一郎教授（教育哲学）84年4月：教職課程主任に就任。

讃岐 和家教授（教育哲学）84年4月：大学院教育学研究科長に再任。

■定年退職

柿内賢信大学院教授（物理学）84年3月：定年退職

84年4月より非常勤講師。

■休職・帰任

中野 照海教授（教育工学・視聴覚教育）：84年4月より85年3月迄研究休暇。

林 昭道助教授（教育学）：84年4月より85年3月迄研究休暇。

長 清子大学院教授（思想史）：1年間の研究休暇を終え83年12月帰任。

Ben C. Duke 教授（比較教育）：6ヶ月の研究休暇を終え84年3月帰任。

田坂 興亜準教授（化学）：タイのスリン・ティーチャーズ大学招聘準教授の1年の研究休暇を終え83年8月帰任。